

第2回 東京工業大学先端無機材料共同研究拠点運営委員会議事要録

日 時 平成23年3月8日(火) 10時～12時00分

場 所 東京工業大学すずかけ台キャンパス 応用セラミックス研究所 1階会議室

出席者 岡 眞, 原科幸彦, 坂井悦郎, 新家光雄, 中田一博, 北條純一, 岡本達雄, 辻田 修, 澤岡 昭の各委員

所内説明者 岡田 清 (応用セラミックス研究所長),
林 静雄 (応用セラミックス研究所副所長),
(建築物理研究センター長),
(セキュアマテリアル研究センター長)
伊藤 満, 佐々木 聡, 若井 史博の応用セラミックス研究所の各教員

資 料

- 別紙1. 東京工業大学先端無機材料共同研究拠点運営委員会規程
- 別紙2. 東京工業大学先端無機材料共同研究拠点運営委員会委員名簿
- 別紙3. 第1回東京工業大学先端無機材料共同研究拠点運営委員会議事要録(案)

資 料

- 1-1. 平成22年度応用セラミックス研究所教員人事について(平成22年10月～平成23年4月)
- 1-2. 応用セラミックス研究所教員組織(平成23年3月1日現在)
- 1-3. 応用セラミックス研究所(学生・ポスドク等)
- 2-1. 平成22年度応用セラミックス研究所「受託研究」等受入一覧
- 2-2. 平成22年度応用セラミックス研究所「民間機関との共同研究」受入一覧
- 2-3. 平成22年度応用セラミックス研究所「その他の機関との共同研究」受入一覧
- 2-4. 外部資金受入状況について
- 3-1. 平成22年度共同利用研究における利用研究者データ及び出張状況について
- 3-2. 平成23年度共同利用研究申請書応募一覧 研究種目別(H23.2.21締切)
- 4-1. 国際会議・シンポジウム・ワークショップ報告会開催状況
- 4-2. 応用セラミックス研究所講演会開催状況
- 4-3. セキュアマテリアル研究センター講演会開催状況
- 4-4. 建築物理研究センター講演会開催状況
- 5-1. 平成22年度非常勤講師一覧
- 5-2. 平成22年度学術講演講師一覧
- 6-1. 応用セラミックス研究所 受賞者一覧
- 6-2. 2010年～2011年パブリシティ一覧
- 6-3. 研究成果が新聞・テレビなどへ取り上げられた件数の推移
- 7. 応用セラミックス研究所「産業財産権調査表」
- 8. セキュアマテリアル研究センター活動報告(平成22年10月～平成23年3月)
- 9. 建築物理研究センター活動報告(平成22年10月～平成23年3月)
- 10. 全国共同利用附置研究所連携事業「特異構造金属・無機融合高機能材料開発共同研究プロジェクト」の活動報告
- 11-1. 平成23年度特別経費(プロジェクト分)概算要求事項の概要
(特異構造金属・無機融合高機能材料開発共同研究プロジェクト)
- 11-2. 平成23年度特別経費(全国共同利用・共同実施分)概算要求事項の概要
(先端無機材料共同研究拠点の形成)
- 12-1. 平成24年度特別経費(プロジェクト分)概算要求事項の概要

(特異構造金属・無機融合高機能材料開発共同研究プロジェクト)

- 1 2-2. 平成24年度特別経費(全国共同利用・共同実施分)概算要求事項の概要
(先端無機材料共同研究拠点の形成)
- 1 3. 応用セラミックス研究所の第2期中期目標・中期計画と関連する将来計画

別冊配布資料

- 応用セラミックス研究所活動報告書(要覧)
- NEWS LETTER (No.25)

閲覧資料

- 建築物理研究センター 8 CUEE CONFERENCE PROCEEDINGS Volume 1
- 建築物理研究センター 8 CUEE CONFERENCE PROCEEDINGS Volume 2

議事要録の確認

議長から、第1回東京工業大学先端無機材料共同研究拠点運営委員会議事要録について説明があり、これを承認した。

議 題

1. 教員人事について(下半期)

岡田所長から、資料1-1~1-3に基づき、応用セラミックス研究所の教員人事、組織、学生数等について説明があった後、種々意見交換が行われた。

澤岡議長：資料1-3の留学生の数は、博士・修士の数の内数ですか？

岡田所長：その通りです。

原科委員：修士122名とあるのは、1年生の数ですか？

岡田所長：総数です。本研究所は、総理工の5専攻と関係しています。

新家委員：ポスドクはどういう所に就職しているのですか？

岡田所長：具体的には把握していませんが、アカデミック分野が多いと思われます。

澤岡議長：どこでもかなり深刻な問題となっているのではないかと思います。本当にきちんとした就職先が見つかっているのか心配ですが。

岡田所長：陪席している教員でポスドクの就職先を具体的に知っていたら発言して下さい。

神谷教授：細野プロジェクトで今まで何人かポスドクがいましたが、旧国研関係で産総研、理研等、大学では名古屋大学、九州工業大学、都立大学等です。その他、会社に就職するケースも多く、東京インスツルメンツ、HOYA等に行きました。少なくとも我々のプロジェクト関係では、オーバードクターになったことはないのですが、決まるまでは2、3年かかる場合が多くなっていることは確かです。

澤岡議長：定職に近いところに落ち着いているということですね。

神谷教授：基本的にはそうですね。

岡田所長：神谷先生、ありがとうございました。

澤岡議長：大変いい例だとは思いますが、他にございませんか？

原科委員：博士課程の学生が45名とすると1学年15名ぐらいだと思いますけど、これらの学生はだいたい3年で終わって、あんまり過年度はいませんか？

岡田所長：ケースバイケースですが、あまり過年度はいないと思います。

原科委員：分野の違いもありますが、私の分野は過年度学生が多い方なので。

岡田所長：原科研究科長の分野に比べると、そのケースは少ないと思います。

坂井委員：博士の中で、社会人の割合はどれくらいですか？

岡田所長：申し訳ありません。調べてございません。

岡委員：PDの中で東工大と書いてあるのは、これはどういう風にサポートされているのでしょうか？

別紙 3

岡田所長：この分は、所内の教員の外部資金で採用しているポスドクになります。

岡委員：資料に記載されていない外部資金ということでしょうか？

岡田所長：そうでよろしいと思います

澤岡議長：はい。ありがとうございます。

次に、平成22年度活動状況につきまして、岡田所長より説明をお願いします。

2. 平成22年度活動状況について

(1) 受託研究及び民間等との共同研究等の受入状況について

岡田所長から、資料2-1~4に基づき、説明があった後、種々意見交換が行われた。

新家委員：特に若手の最先端研究プログラムですが、何か、インセンティブを付けていますか？

岡田所長：本研究所では、外部資金等を獲得し、希望・要請があった場合には、なるべく研究スペースを割り振ることをしています。

新家委員：研究スペースは、無料となるのですか？

岡田所長：はい。その分については、無料としています。ただ、そんなに広いスペースは割り当てられません。また場合によっては、特任助教の称号付与等についても便宜をはかっています。新家所長から東北大学では個人的な収入に対するインセンティブを検討している旨お聞きしましたので、本学の執行部にその可能性などを少し聞いてみようと思っているところで、現在具体的な動きはありません。

新家委員：これらの若手は、他に大きな外部資金を取っていたりしていますか？専念義務の関係から場合によっては、外部資金が減ってしまいますが。

岡田所長：おそらく、本研究所の場合はそのようなケースはないと思います。ただし、専念義務による影響が無いわけではありません。

新家委員：もう1点、間接経費は取らない方向なのか、通常の扱いなのかについてはどうですか？

岡田所長：本学は、間接経費の部局配分割合がなかなか厳しく、部局に配分された経費については研究所で全部使わせて頂きたいというのが本音です。

新家委員：もちろん、本部で取る分と研究所で取られる分があり、本部で取られるのは仕方ないのですが、研究所の分をフィードバックしているかどうかです。

岡田所長：新家所長のところと比べますと、部局に入ってくる分が少なく、大学本部が35%、それから環境整備費の分が30%になります。部局分は35%で、さらに、すずかけ台地区で7.5%地区の分として取られますので、実際には30%弱しか入ってこないということです。さらにフロンティア研究機構、ソリューション研究機構と兼務してる場合には、そちらの部局と折半になるため、10%程度になります。つまり、たくさん外部資金が獲得できているのですが、実際に研究所にきている間接経費はそれほど多くはありません。そのため、個人に還元できると良いのですが、現在のところは全部研究所で使っています。

新家委員：どうもありがとうございました。

澤岡議長：受託研究等補助金の間接経費の割合は、一律に配分されていますか？

岡田所長：それぞれの資金で間接経費の付き方が違います。

澤岡議長：例えば細野先生の大きな補助金の間接経費についてはどうですか？

岡田所長：細野先生のその件については、実際に必要な経費を積み上げた間接経費になっているので、現実には研究所には入っていないと思います。

有山主査：細野先生のこの補助金については、研究所には間接経費は入っておりません。

岡田所長：つまり、本当の意味で必要な間接経費が付いているので、当初から30%とか20%とかいった話ではありません。

澤岡議長：管理委託は東工大ではなくJSTになったのでしたか？

岡田所長：確か本学が管理委託を受けていると思います。

別紙3

- 澤岡議長：最近は、会計的に複雑になっていますね。結論としては、研究所が請け負っているのでしょうか？
- 岡田所長：大学が請け負っている形だと思います。
- 澤岡議長：そうですか。
- 岡田所長：ですから研究所には入っていません。
- 澤岡議長：他にございませんか？
- 坂井委員：科研費の獲得額が減少しているということですが、継続分についてはかなり金額が減らされるので、その影響で減っているのではなく、全体として減っているのでしょうか？
- 岡田所長：全体として多いとは言えません。これは課題かなと思っております。
- 岡本委員：その他の機関との共同研究ということで、22年の4月1日から23年の3月31日の1年間で14億円弱の大きな金額、昨年と比べると10倍以上にUPしていると思うのですが、これはさっきのお話を伺っていると、応セラ研の方で受け入れて、いろんな所にそのお金を配分されて研究していこうとされている様に理解しましたが、実際このお金を1年間のうちで、どの様なかたちで使っているのかを教えてください。
- 岡田所長：今年度非常に大きな金額になっているのは、先ほどより話に出ていました細野教授が獲得した内閣府の外部資金ですが大半を占めています。これについては、実際には研究所はノータッチです。あまりフェアではないのかもしれませんが、所属教員が獲得した研究費として計上しています。その他は実際に研究所に入ってきているものですが、この受入金額が、すべて今年度分という訳ではありません。10と11番の研究費については、全体の金額がこの金額です。つまり、プロジェクト全体の金額が計上してあるものと今年度分を示しているものとデータの整理が不十分でした。
- 岡本委員：と言うことは、凄く大きな金額を、ある研究室としては取っているけれども、研究所としてそれを使うわけではなくて、配分する形になっていることなのですね。
- 岡田所長：基本的に各研究者が獲得した研究費は各人が使う研究費で、研究所に入ることは無いのですが、その研究費に間接経費が付いている場合には、先ほどより説明した形で研究所に配分されるということになります。
- 岡本委員：そうですか。そんなに収入があるわけではないということですか。
- 岡田所長：例えば、今年度の3番の資金が毎年獲得できる訳ではありません。平成19年度から3年間のデータから分かるように、だいたい1億数千万円ほどの額が経常的に入っているということです。
- 澤岡議長：例えば原先生のマッチングファンドですが、たぶん民間のお金もこの中に入っていると思うのですが、研究所がマネージするお金が、ここに書かれている額と考えてよろしいでしょうか？
- 岡田所長：いえ、これも民間の分も含んでいる数字になります。
- 澤岡議長：NEDOが直営でやるということですね。
- 岡田所長：はい。
- 澤岡議長：大学へは受託研究費として15%入ってくるということですか。
- 岡田所長：そうだと思います。NEDOのマッチングの場合は、一般に見かけほど大学教員の取り分はありません。その割合は、各プロジェクトで異なりますので、なんとも申し上げにくいところです。
- 澤岡議長：最近、非常に複雑になり、また年々変わってますので、大変理解が難しく、私も随分苦労しております。
- 北條委員：資料を見ると、平成23年で終了する外部資金が多く、24年度以降の見通しがなんか不明なのですが。
- 岡田所長：例えば真島先生の獲得している経費についてはどうですか？
- 真島教授：今年受入の金額を示しています。

別紙 3

- 北條委員：そうですか、来年度以降はまだ確定していないから、書けない。そういうことなのですね。
- 有山主査：各教員から提出のあったデータは大半が今年度分を抽出したのになります。
- 北條委員：記載の仕方が、曖昧になっておりますね。
- 岡田所長：実は、この資料は他の大学の運営委員会の資料を参考にさせていただいて、作ったもので、その意味ではまだきちっとした資料になっていない部分もあるかもしれません。
- 北條委員：この受託研究期間が、どこまであるのか分からないですね。
- 岡田所長：今回お出ししている資料は、10、11を除けば、今年度のものとなっています。ただ、後ろが何年まであるのかは、ここには記載していないことになります。
- 北條委員：分かりました。
- 岡田所長：次回からは、全体の期間が分かるようにいたします。
- 澤岡議長：真島先生分は24年、細野先生分は26年まで続くとなっていますね。
- 岡田所長：提出されたデータをそのまま使っておりますので、そのような記載となっております。
- 澤岡議長：全部が終わるわけでは無いということですね。
- 岡田所長：はい。
- 澤岡議長：次回以降はそのあたりも見えるように、よろしく願いいたします。それでは、共同利用・共同研究につきまして、伊藤共同研究支援室長よりお願いいたします。

(2) 共同利用・共同研究拠点

伊藤同支援室長から、資料3-1～2に基づき、本共同利用・共同研究拠点について説明・報告があった後、種々意見交換が行われた。

- 中田委員：資料3-1の2枚目の共同利用研究者出張状況の見方が良く分からないのですが。
- 伊藤同支援室長：出張者数は延べ人数ですので、同じ方でも2回来られれば、それが2人分と言う数え方になります。
- 中田委員：分かりました。海外の研究者の方もかなり入っていますね。
- 伊藤同支援室長：はい。
- 澤岡議長：1日ごとに、延べになるのですか？
- 伊藤同支援室長：そうです。
- 澤岡議長：10日いると出張者数は10名になるのですか？
- 林副所長：それ違うと思います。件数だと思います。
- 伊藤同支援室長：件数の間違いでした。
- 原科委員：件数とすると1日、2名とか、3名とか、もうちょっと多めにいる感じですね。
- 伊藤同支援室長：そうですね。支援室のデータを見ていますと、ほぼ毎日、数名の出張があります。
- 澤岡委員：岡田所長はいつも、こういう出張者に対する宿舎にお困りの様なのですが、これだけの人数に対して宿舎を、どのように確保しているのでしょうか？
- 岡田所長：要請を受けた場合は、共同利用支援室の方でホテルを手配していますが、かなりの方は何度も来られていますので、ご自分で対応されています。外国からの方については、このキャンパスに宿舎はありませんので、例えば少し長期に来られる場合には、大岡山の国際交流会館を使って頂くことになり、遠いので、その辺が大変困っています。
- 岡本委員：専用の宿舎はいっさい無いのですか？
- 岡田所長：ありません。確か中田所長の所は、宿舎をお持ちだったと思いますが？
- 中田委員：我々の所は、蛋白質研究所と一緒に持っていたのですが、立て替えの際に、

別紙 3

大阪大学がそれを引き取り、民間の資金を入れて、新しく春日丘ハウスを造りました。我々の研究所は、優先的にいくつかの部屋を確保し、手当てしています。

岡田所長 : 大岡山からですとちょっと遠くなるものですから、やはりこのキャンパス近くに宿舎があるといいと常々思っております。

中田委員 : 先ほど説明した宿舎は今年出来たのですが、稼働率が悪く、大学の監事から問題にされ、努力して90%を越えるまで改善しました。

岡田所長 : それは凄いですね。

中田委員 : 逆に今度は、なかなか入れない事態になっています。研究所は年間契約で部屋を押さえていますから、長期用の部屋を年間契約で1つ押さえて、あとは5部屋程度を持ち分として、確保しております。

澤岡議長 : 前回もご意見がでましたが、すずかけ台は外国人研究者のための独自の宿舎については見通しが暗いですね。

岡田所長 : 最近、すずかけ台の駅から、歩いて5分ぐらいの所に、1棟のアパート建物の売買契約が成立しそうだという話があります。留学生用が主ですが、その中に1, 2室、研究者用のスペースの要望を出しております。

原科委員 : 長期用として、その件には期待をしています。

澤岡議長 : 次に講演会・シンポジウムについて、資料4-1~4-4を基に、岡田所長より説明をお願いします。

岡田所長 : はい。よろしければ、議題3~6までまとめて、進めさせていただければと思います。

- (3) 講演会・シンポジウム (資料4-1~4-4)
- (4) 非常勤講師・学術講演講師 (資料5-1~5-2)
- (5) 研究成果等の社会広報 (資料6-1~6-3)
- (6) 産業財産権 (資料7)

岡田所長から、資料4-1~6-3に基づき、説明・報告があった後、種々意見交換が行われた。

澤岡議長 : パブリシティが非常にたくさんあると思うのですが、これは大学広報、または、研究所として広報はこうするというポリシーはあるのでしょうか？

岡田所長 : すずかけ台地区で、プレス関係の発表を出来る組織や場所を持てれば良いのですがありませんので、大学の広報を通すこととなります。しかし、いわゆる投げ込みではなかなか取り上げてもらえません。現状では、大半はマスメディアからの働きかけで、こちらから積極的にPRしてということはありません。よく取り上げられるのは細野グループの研究成果で、その他最近は地震の関係で、和田先生、笠井先生等の建築分野の記事が取り上げられています。

辻田委員 : 今の新聞発表等を増やしていくという話で、年度初めとかに、予定はどれくらいあるのかというような調査はしているのでしょうか？

岡田所長 : いえ、まだそういう計画的なことはしていません。用意していますのは、広報に説明資料を出す際のテンプレートを作っている程度です。研究ですので、予定どおりに成果が出るかどうか、そう上手くはいきません。本当はもっと積極的にこちら側から働きかけるべきとは思っております。

北條委員 : 新聞や雑誌の場合には、自治体、後援会、財団などのスポンサーを利用すると、載りやすいようです。例えば、企業等と技術交流会をどこかの新聞社と組んで行くと、新聞に取り上げてもらいやすいです。何かそういった仕組みがあると、やりやすい様な感じがしますね。

岡本委員 : 今の話に関連して、例えばシンポジウムなどを行う時に、メディアに取材依頼をしていないのでしょうか？

別紙3

- 岡田所長 : やっております。
- 岡本委員 : そういうことをマメにしますと、テーマによっては、メディアに取材をしてもらえることが多いと思うので、そういうことも考えては如何でしょうか。
- 岡田所長 : 大変良い助言をいただいたと思いますので、実現する方向で働きかけたいと思います。
- 岡本委員 : 基本的には増やしていきたいと考えておられるのですか？
- 岡田所長 : そうです。今のところは、我々の努力ではなく、純粹に所内の教員の成果が世の中に注目されていると私自身思っております。マスメディアで取り上げられることにより、少し長い目で見て、若者に少しでも我々の研究所に興味をもってもらい、大学で研究をしたいという気持ちをもってもらえればと思っておりますので、研究所としても力を入れていくべきだと考えております。併せてホームページを充実することも重要だと思っておりますので、その辺も検討しているところです。
- 澤岡議長 : 大学では、特許実施料は例外的にしか無いのですが、細野先生の研究において、サムソンが1兆円産業までもっていききたいという動きがあると聞いているのですが、本当に生産に結びついた時の特許料、実施料は、大学には入ってくる性質のものなののでしょうか？神谷先生が、一番ご存じでしょうか。
- 神谷教授 : 比率は定かではないのですが、まずJSTと大学に折半で入ってきて、大学への配分を、また部局と分ける形になると思います。
- 澤岡議長 : JSTと大学が折半し、その分を分ける形になるのですね。
- 岡田所長 : 研究費の種目によっては、資金を出した側がある程度取ることになりますので、その辺もケースバイケースになると思います。ただし、実際に実施料が入ってくるというのは、そんなに多くないというのが、現実であります。
- 澤岡議長 : それでは、セキュアマテリアル研究センターの活動報告につきまして、林センター長よりお願いいたします。

3. セキュアマテリアル研究センター活動報告について (資料8)

林センター長から、資料8に基づき、本センターの活動状況について説明・報告があった後、種々意見交換が行われた。

- 澤岡議長 : このセンターは、時限センターで、今年度は何年目でしょうか？
- 林センター長 : 今年度で5年が過ぎて、ちょうど半分になります。
- 澤岡議長 : 折り返したところということですね。
- 林センター長 : はい。
- 岡田所長 : 補足しますと、今後の活動予定に、衝撃に関する国際ワークショップの記載がありますが、応セラ研にはユニークな研究分野として衝撃関係の研究活動があります。同じ分野の研究所として、世界的に有名なドイツのエルンストマッハ研究所と連携を深めようと研究交流等を強化しており、セキュアマテリアル研究センターが、その受け皿になっています。
- 中田委員 : 今のワークショップのところなのですが、エルンストマッハ研究所所長の他に、米国空軍関係の研究所長の講演が有ります。現在、軍との関係については、安全保障の関係も含めて微妙で、我々の大学のレーザー研がレーザー核融合で、アメリカのローレンス・リバモア国立研究所と共同研究することに対して朝日新聞の記事が出され、非常にセンシティブになっています。特に軍の資金が入っている研究所と書かれると、しっかりとした対応をする必要があるということで、文科省と相談をしているところです。そのあたりは如何ですか？
- 林センター長 : この講師は近藤前所長との付き合いも長い方で、研究所の客員教授として1年間滞在したことがある方ですので、あまりその辺のことは考えていません。要するに軍に直接関係した内容の講演では無いので問題はな

別紙 3

いと思っているのですが。

中田委員 : 本学の場合は、そのあたりを明確にすることを求められました。

林センター長 : はい。

澤岡議長 : もう一人の講演者が、アメリカの空軍関係ということで、講演の内容が関係なくても、軍の方と研究となると、そのようにみられますので。

岡田所長 : ワークショップ等で、講演してもらう場合にもそういうことをケアしなければならぬのでしょうか？

中田委員 : それは問題無いとは思いますが。

林センター長 : シンポジウム自体が共同研究の一環になります。

岡田所長 : この方は共同研究のメンバーに入っているのですか？

林センター長 : はい。入っております。

岡本委員 : この衝撃の分野で、防衛大学校の方がおられますよね？例えばそちらとの共同研究を行う場合は、関係する先生によっては、問題となることもあるということでしょうか？

中田委員 : なると思いますね。

澤岡議長 : 東工大は日本の中では、その辺の自由度が比較的高い大学のように思います。

神谷教授 : 本学では、アメリカのエアフォースから研究費を受け入れているケースが毎年あるのですが、学内の研究戦略室で、レギュレーションを決めています。確か5段階レベルの3までですと、許可を取れば共同研究としてお金を受け入れてもいいと言うレギュレーションがあります。

中田委員 : そのレベルでは、何らかのチェックがあるのですか？

神谷教授 : はい。おもにコントラクトの内容で分かれているようですが、正確なところまでは記憶していません。

澤岡議長 : 最近アメリカ軍の出先機関との共同研究は、全国的に増えているようです。

岡田所長 : 大学全体としては、そういう網をかけていることになります。最近問題になることがある海外貿易保障の関係については気にしているのですが、こちらの方についてはあまり頭に有りませんでした。海外との共同研究などを推進することを求められている割には色んなところで難しい問題があります。

中田委員 : そうですね。

澤岡議長 : 今日ご注意くださいという点にとどめて。先に進ませていただきます。建築物理研究センター活動報告につきまして、林センター長からご説明をお願いいたします。

4. 建築物理研究センター活動報告について (資料9)

林建築物理センター長から、資料9に基づき、本センターの活動状況について説明・報告があった。

澤岡議長 : 建築物理研究センターは、もっともっと世間から注目されていいと思うのですが、応用セラミックス研究所の看板の中に埋没して、私は大変残念だなど思っていました。ところが、今日事前の打ち合わせで岡田所長から、もっと表に看板を掲げる方法などを検討中とのことで、是非もっと元気にやっていただきたいと思います。

林センター長 : 和田先生も田中先生も今年で定年ですので、元気がなくなるか心配をしています。

澤岡議長 : よろしく願いいたします。

北條委員 : 1つだけ簡単な質問ですが、6番目の21世紀COEという名前は、まだ使っているのですか？

林センター長 : グローバルCOEの間違いですので、訂正して下さい。

別紙 3

澤岡議長 : それでは、全国共同利用附置研究所連携事業について、活動状況を若井プロジェクトリーダーからお願いいたします。

5. 全国共同利用附置研究所連携事業「特異構造金属・無機融合高機能材料開発共同研究プロジェクト」の活動報告について (資料10)

若井プロジェクトリーダーから、資料10に基づき、本実施状況について説明・報告があった後、種々意見交換が行われた。

澤岡議長 : 如何でしょうか？前回、思ったほどは文科省の方から経費配分がないという話が出ていましたが、この後の概算要求にも関係するのでしょうか？

岡田所長 : はい。

澤岡議長 : では、その時にお願いいたします。よろしいでしょうか。それでは、次に、概算要求について、岡田所長よりお願いいたします。

6. 平成23年度概算要求について (資料11-1~11-2)

岡田所長から、資料11-1~11-2に基づき、本概算要求の内容について、説明・報告があった後、種々意見交換が行われた。

澤岡議長 : 11-1の資料の見方が良く分からないのですが、応セラ研の取り分は、このうちどれなんですか？

岡田所長 : 全体のプロジェクトの経費の欄の真ん中あたりに法人負担額があり、その中に学内負担額と運営費交付金所要額があります。その1番数字の小さい金額が、実際に文科省の方からくるお金となります。

澤岡議長 : 36,720,000円ですか。

岡田所長 : はい、そうです。

澤岡議長 : 東北大学は、いかがでしょうか？

新家委員 : 本学は早稲田大学への配分の分もありますので。

岡田所長 : 東北大は確か、1億数千万円であったと思います。これはぜひ研究所内の教員の方に聞いていただきたい、独り言に近い発言ですが、6大学、特に前プロジェクトから関係している3大学の中で、本研究所が1番少ない配分になっています。これは、やはり研究所としての実力を、文科省からそういう風に評価されていると私自身思っています。第1期中期の評価結果も厳しい評価結果でしたので、頑張ってもう少し高い評価を得られる研究所にしていきたいと思えます。

澤岡議長 : 中間評価も非常に厳しく予算に反映しており、そのあたり容赦ないですね。

岡田所長 : ただ、中間評価の後半2年間の評価について、顕著な業績変化を示す説明資料を出した結果、3つの項目についてオール2の評価が、4・3・2の評価に変わりました。

澤岡議長 : では、平均点3になったということですね。いかがでしょうか？それでは、岡田所長、先へ進んでください。

7. 平成24年度概算要求について (資料12-1~12-2)

岡田所長から、資料12-1~12-2に基づき、本概算要求の内容について説明・報告があった後、種々意見交換が行われた。

澤岡議長 : この資料12-1と12-2を比べてみますと、それぞれが6年計画で、金額は別として、この2つの項目で毎年運営費交付金の形で、文科省の方から直接というか、大学で査定されて研究所経費として配分される金額がこれだけと理解していいんですか？

岡田所長 : 要求して認められたと解釈していただければと思います。一般的には、今

別紙 3

年度の額を上回ることは無いと思われるのですが、当初要求額を変えずに各年度の要求をしていますので、当初要求の予算規模とお考え下さい。

澤岡議長 :そこで疑問に思ったのは、研究所はこれだけ直接的に文科省から運営費交付金をもらうのだから、大学全体の運営費交付金から研究所への配布額については、相当分を減額され、幾ら概算要求して予算を獲得しても元も子もない、そんな心配は有りませんか？

岡田所長 :それは有りません。もし、それをされたら概算要求なんて出しませんので。

澤岡議長 :ここで多く取れば、その分だけ増えると考えてよろしいのですか？

岡田所長 :もちろんそうです。ただし、これはプロジェクトの活動に対する経費です。

澤岡議長 :はい。よろしいですか？それでは次をお願いいたします。

8. 第2期部局中期計画と将来計画 (資料13)

岡田所長から、資料13に基づき、本件について説明があった後、種々意見交換が行われた。

澤岡議長 :あと予定した時間が15分ございますので、ご質疑の点、ご意見などを自由にご発言いただきたいと思います。よろしく願いいたします。

原科委員 :最後のⅡの組織改組を中心とした具体的課題・展望の1番目で、建築及び無機分野の分離・独立というのは、具体的にはどの様に行うのですか？

岡田所長 :原科研究科長もご存じのように、本学には統合研究院があり、研究を主体とした組織は、その傘の中に入ります。例えば1つの姿として、私の個人的な意見では、建築物理研究センターで研究所をつくるのが考えられます。

原科委員 :もう一つ別に研究所を作るといことですか。

岡田所長 :別と言ってもいずれにしろ統合研究院に入ります。1例が、像情報の研究施設です。かつては工学系に所属しておりましたけど、独立して研究所として、統合研究院に入っています。そのサイズを見ると、研究所のメンバーに少しメンバーが加われば、像情報と同じサイズの研究所が建築分野でも出来ると言うのが、私の考えです。

原科委員 :それは、学外に、建築分野の活動をしっかり出していくために、その方がいいと考えているのですか？

岡田所長 :はい。そうなれば、大学の組織の中にも建築物理の名前が出ます。建築分野は構造系の方向で活動したい意向が強いようですので、よりストレートに学内外に名前を出せることとなります。その一面、研究所として無機系もそれほどたくさん人員を抱えている訳ではありませんので、無機系もそういう意味では辛い一面もあることは間違いないのですが。それを覚悟してでも、分離した方が、お互いにとって、より良い状況になると言うのが私の考えです。

北條委員 :それに関連して、よろしいですか？統合研究院を核として、傘の中で研究所があつて、概算要求は研究所単位で出しているのですね？

岡田所長 :少なくとも今のところはその通りです。

北條委員 :概算要求を出せないと分離しても、意味ないですね。研究院が傘を使って、概算要求を1本化することになると、これは大変なことになりますので。

岡田所長 :研究所が部局として成り立たなくなる可能性がゼロではないのですが、部局長の立場としては、そうならないようにはしていきたいと思っています。

新家委員 :今の件で、統合研究院には、研究院長はいるのですか？

岡田所長 :はい。

新家委員 :それでいて、研究所は部局として認められている？

別紙 3

- 岡田所長 : 統合研究院は言わばバーチャル組織ですが、院長はいます。
- 新家委員 : 院長はどのように選んでいくのですか？
- 岡田所長 : 最初は学長だったのですが、今は副学長です。
- 新家委員 : それは学長指名の形ですか？
- 岡田所長 : 研究担当の副学長があたっています。
- 新家委員 : そうなのですか。
- 岡田所長 : 今後どのようになっていくかは分かりません。しかし、ゆくゆくは部局単位と考えるとつくったのだと思います。
- 坂井委員 : この組織改編は、4つが全部連動している様に思うのですが、たぶん2番目が優先じゃないかと思うのですが、その辺はどういう風にお考えなんでしょうか？
- 岡田所長 : 時系列的には確かに2番目が、1番優先されることかと思えます。それと連動する形で、1とか3、4が連動してくると思えます。大学全体の組織改編とも当然からみますので、この辺はどうなるか分かりませんが。
- 原科委員 : 原子炉研方式での単独専攻をつくるとの考えがあったと思うのですが、これは大変重要なポイントだと思います。総合理工学研究科全体としても、いま改組を考えており、今回の件、大変だなど思っております。3月からワーキンググループを立ちあげて、進めたいと思っております。
- 辻田委員 : いま時系列的に順番と言われたのですが、良く分かっていないので教えて下さい。中期目標のスケジュールと時系列と言われたスケジュールがどう関係してるのですか？
- 岡田所長 : 中期計画は6年スパンです。それで、今年度がその初年度になります。そのことと、最後に説明したことは、当然関係はしますが、直接的に関係している訳ではないところもあります。つまり、中期計画には、見通しが立てにくい事項については、書きにくい事情があるものですから、例えば3)の【44】に色々と歯切れの悪い形で書いてあるのが今の話題に対応しています。例えばセキュアマテリアル研究センターの改組は、いまその案を出している段階なんですけど、これは話が順調に進んでも24年度からになり、それが第2期中期の中で実現させていきたいと言う話になります。1番の項目は、一挙に話が進むかもしれませんし、かなり時間がかかるかもしれません。
- 辻田委員 : いずれにしろ、今後5年間の中での活動として、これをやりたいということですか？
- 岡田所長 : はい、やりたいということです。
- 辻田委員 : 分かりました。
- 岡本委員 : ちょっとまだピンとこないのですけれども、例えば1番のイメージなんですけれども、今は建築物理センターは、応用セラミックス研究所の中のバーチャルなセンターとして位置づけられている話だと思うのですが、統合研究院の傘の下に、今の応用セラミックス研究所と言う名前になるのかどうか分かりませんが、セラミックス研究所と建築物理研究所というか、そういう様な、横に並んで存在する、そういうイメージですか？
- 岡田所長 : はい、そうです。ですから普通外から見たら、附置研があって、その中に建築物理研究所というのが加わるということです。
- 岡本委員 : イメージはですね？
- 岡田所長 : イメージです。
- 岡本委員 : それを6年のどの時期でやるか、分からないけれどやっついこうと、こう言うことですね。
- 岡田所長 : ただ、先ほど申し上げましたように、中期計画の中に盛り込んでしまうと、これ実現しないと非常に悪い評価を受けてしまうので、なかなかここに書けないということになります。

別紙 3

- 原科委員 : 今の私の理解では統合研究院は、当面、連絡調整機能というのは、あまり考えないということよろしいのですか？
- 岡田所長 : 公式的にはそうではないということでしょうが。
- 原科委員 : でも、実際の今の位置づけは、そんな印象がありますよね。
- 岡田所長 : 今のところはそうですね。
- 岡委員 : 非常に意欲的な戦略と展望をお持ちだと思うのですが、大学全体の立場から見ると、やや大学が行っていることと逆向きな気がします。現在、学内センターを見直す方向にあって、今後、研究所もどんな形で統合研究院に統合していくかという立場でたぶん議論が進んでいると思っています。その中で、こういう風に今の研究所を分離し、しかも単独専攻で人材教育するって言うのは、受け入れられにくい方向だろうなと思います。もう少し既存の専攻、あるいは研究科との間で人材の交流をするような柔軟な組織が、研究所でもつukれないのかと思うのですけれども。そのような戦略は無いのでしょうか？
- 岡田所長 : そのプランは私が研究所に移る前に、散々こちらの地区では議論があったと聞いております。元々、統合研究院の中には、そのミッションを入れようとしたのですが、そこが上手く実現してないということだと思います。例えば1つの案としては、ある時期、研究に重点を起きたい研究室が、統合研究院の中で集中的に研究活動し、それが終わったらまた戻る、といったプランもあったとのこと。この案が完全に無くなった訳ではないという風に、私は理解しておりますので、今後、統合研究院が本当に実質化する方向にいくのであれば、そのようなプランがまた復活してくるかもしれませんし、それが本来の研究所のあるべき姿かもしれません。ただ、人事交流と言うのは、掛け声は易く現実には難しいと言うのが、実態かと思えます。
- 岡委員 : 融合型でやっている研究所を分離することは、分野も固定するし規模が小さくなって、例えば今問題になっている人事ポイント制の導入に伴う人員削減がきた時にも、小さい部局ほど不利になります。それらをまとめて考えると、分野を固定して小さくまとめる方向に進んでいくのは、少し危険な感じがして、それを研究所の主たる展望とするのには疑問があるかと感じました。
- 北條委員 : 研究・教育面に関する事項の23ですが、統合研究院と連携して社会のニーズに応える「ソリューション研究」にも取り組むとなっておりますが、その具体的な方策があるのか、これがいつも悩みなのですけれど。
- 岡田所長 : 現実にはソリューション研究機構というのがあり、実際に本籍がそちらに移っている教員がいます。これはある期間限定で、また戻ってくるようになっていきます。ですから、元部局とは常につながっているのですが、この立場の教員が1名います。また、フロンティア研究機構も同じです。こちらは期間がはっきりしており、1スパン5年で流動することになっていきます。研究所ですから、新しい研究分野は大事ですが、社会に対するアウトプットも重要で、それがソリューションの切り口になります。1人の教員が両方出来るっていうのは希有ですから、どちらか一方に重きをおくことになるんだと思います。
- 北條委員 : 先ほどの広報の話でもありますが、新聞で取り上げられないのは、一般大衆が読んでくれないからです。読ませる記事って言うのが、重要ですよ。
- 岡田所長 : そう言う意味では、本を書いたりするのも大切なかもしれません。
- 北條委員 : こんなに社会の役に立ちますよとか、ソリューションの技術ってこんなものですよとか、こういう様な視点も重要だと感じています。
- 澤岡議長 : 研究所を小分けに小さなグループにして大きな傘の下に入るやり方が、大学全体の大きな流れから言って、逆に損なのではないか、適当ではないと

別紙3

という意見も出ました。一方、建築系の先生にとって建築物理研究センターは、バーチャルな組織だけに、表から見えないという悩みがあって、その兼ね合いといたしまして、どうするべきかというところが、所長をはじめ、関係者が一番悩んでいるところかと思えます。時間が過ぎていきますので、本日いただいたご意見を参考に、所長にさらに悩んで頂きたいと思えます。

北條委員：ちょっと簡単な質問なのですが、元素戦略という言葉が、国際的に通用しているのかどうかという問題にいつも悩んでおります。何年か前に海外の会議に出て、フューチャープランとして日本側から、”元素戦略”の言葉を出したのですが、どう説明しても理解してもらえず、最後は、リサイクルかと言われて、説明が非常に難しいなと思えました。こちらの元素戦略ワークショップでどのように英語に訳しているのだろうと思ったら、”Elements Science and Technology for Materials Innovation”を使っていました。つまり、まだ”元素戦略”という英語ができていませんね。ここらあたりは、国際的に仲間を増やしていくことによって、初めてセンター化とか、そんなのができるんじゃないのかなと思えます。それは今後の課題でしょうが。

岡田所長：それぞれの国のエゴをどういう風にしていくのかと言う話にもつながるということと、広い課題を全部対象とするのではなく、大学らしいことをやるということ、我々としては元素の持っている本質的な特性を引き出したいと、細野教授がよく言っている方向の基盤的な研究を中心にしたいのですが、英語ではまだ認知されていないかなと思えます。

澤岡議長：先週の金曜日に文科省と経産省共催のシンポジウムがあり、“元素戦略”ということばは、まだ十分に国際的に認知されてはいないけれども、最近では、国際用語になりつつあるといった方がいました。しかし、まだまだ時間はかかりそうです。

ありがとうございました。本日はこれをもって終わりたいと思えます。次回の予定につきまして、我々の任務は1年間任期で、これで終了となるのでしょうか？

岡田所長：別紙2の資料に記載してありますが、2年任期ですので、もう1年お付き合い頂きたいと思えます。

澤岡議長：それでは、次回について。

岡田所長：9月の第1週か第2週で考えていますが、学会等とかなり重なりそうですので心配しています。

澤岡議長：まだ新年度の予定が、まだ見えませんので。

岡田所長：それでは後日決めさせて頂くということをお願い致します。

澤岡議長：なるべく多くの方がご出席いただける日にいたしましょう。それでは本日はこれをおもちまして、終えたいと思えます。

岡田所長：どうもありがとうございました。

9. その他

(1) 次回開催予定について

次回開催については、別途メール等で日程調整を行うこととなった。

以上